

第四節 大震災による新劇人の衝撃と覚醒 その二

―新劇女優陣の震災対処―

森律子帝国劇場初日〳岡田嘉子震災への遭遇〳水谷八重子演劇人への衝撃〳
田村秋子俳優への契機〳山本安英罹災の日々〳東山千栄子人生の転換〳
及川道子倒壊家屋の下〳沢村貞子芝居街の焼尽

大正十二年九月一日、文明開化の精華とも言うべき帝国劇場では、幸四郎・松助先導の女優劇初日が予定されていた。当初施設は大地震の衝撃に耐え、公演が可能とも思われたが、警視庁一帯からの延焼により午後全壊する。「阿漕浦鈴鹿合戦」等への舞台稽古を前日終えた演技陣も、「永田町の梅幸、浜町の幸四郎、今戸の宗十郎、仲町の宗之助、築地の松助ら諸幹部俳優宅、律子、喜久子、浪子、房子、延子、兼子、美弥子、勝代の諸女優宅」も罹災した。① 帝劇柿落しで初舞台に立ちて十三年目、森律子三五歳の初秋である。

① 円城寺清臣編『帝劇二十年―興行年表を主とする帝劇の記録』帝劇旧友会、一九六一年。五七―六〇頁。

「震災に遭うの記」(森律子著『女優生活二十年』)

終生忘れることのできないあの日は、丁度帝劇の初日にあたって居りましたので、一寸とした朝の外出の後、折りから腎臓を病んで臥って居りました母の枕辺近くに食卓を運んで、十一と九つになる姪と四人、朔日の朝の御飯で、さて食事に掛ろうと致しました刹那、どどっという恐ろしい物音。何ともしれず常の地震とは違う大事を直感した私は、いきなり母と子供を引寄せてその上に我が身を伏せてしまいました。が、その時はもう壁土がもうもうと烟のように部屋をこめ、眼もあけられない有様で、前の洋館が、崩れたことも後になって知りました。

小止みを待って、階下の車夫や女中に声をかけてみました処、別に変りもない様子。後から後からと襲って参る余震に、いよいよ危険を覚えたので、慄えながら一心に神仏を念じている母を助け、兎も角も戸外へ出ようと致しましたが、梯子が落ちて下へは参れず、もう既に傾いていますので、二階の欄干から戸障子の倒れた上を伝わって庭へ下り、地面から噴水のように恐ろしい濁流が、一面に噴きだして居る中を、漸く裏の広い原へ逃れました。

雨戸を敷いて飯の座を整え、手近にあった草履、手拭、残り物のお菓子、果物を持出させ、一息ついて四辺を見返しますと、原の横の学校は、二階の軒が地びたを這い、近所の洋館はことごとく満足な形を失い、そのうちに後からあとからと担ぎ込まれる負傷者で、原はたちまち一杯になり、余震の合間あいまに物凄い呻き声さえ聞えて、全く生きた心地もありませんでした。

そのうちに誰かが言い始めた「津浪来る」の声に脅かされ、きれ落ちた電線が蜘蛛の巣の様に大地を這っている中を飛び越えながら、南小田原町の川岸に繋いであった石炭船へ、在郷軍人の助けをかりて家族共ども乗り込みました。この時既に近い町々は炎が上ったらしく、真紅に焼けた亜鉛の肩が続々と舞い落ちて来ますので、皆頭から席を被り、ぎぶぎぶと水を浴せられて居りましたが、その水がまたお湯のように沸き上がるという、いま思い出しても身の毛のよだつ有様で御座いました。

そのうちにも時間が進むにつれ、今日初日の帝劇のことが気に懸かり、築地はこの有様でも丸の内は左程でもなく、開演の運びになっていたら大変と、兎も角も車夫を劇場まで走らせました。やがて足も空に帰ってきた車夫の報告に、警視庁から燃え上った火は、既に隣の帝劇に移り、いま盛んに延焼中と聞きまして初めて事の大事を悟りました。

船の浮いて居る川岸も、はや本願寺の方からの火が移って来て、息づまるような煙が立ち始めました。このままでいては船の焼けるのを待つばかり。私は多少水泳に経験がありますが、病母と幼い子供達を抱えては、とても助かる望みはなし。生死は兎も角、せめて足の自由を付けて置かねばと、決心をいたしました。・・・上がった岸はもう一面の火であります。さてどちらの方角に向って逃げようかと途方に暮れながら、ふと仰いだ時赤く焼けた焼けた空に、ただ一筋の青空を見出しました。本当にその時こそ、命の光を見出した気持で、確かあの空は畏れながら皇居のおわす処と見当を付けて、どうせ終わる命なら御膝下近くに居たいと、その青空を目当てに熱い空気、巻き上がる旋風の中を、病母と子供をかばいながら、絶えず大声に、「互いに手を離してはいけませんよ」と、怒鳴りつつ夢中で駆けだしました。

幾度か横町を曲ろうとしては火に煽られたり、ぎっしりつまった荷車の下をかいぐり、火の粉と煙に喘

ぎあえぎ、何処をどう通りましたか、とにかく船から逃れたのが八時頃であったのに、宮城前の楠公の銅像のもとに辿りついたのは、もはや夜の十二時少し前でありました。芝生の辺りははや大勢の人で埋められ、提灯をつけて迷い子を探す呼び声が、入り乱れて物凄く聞えます。それにつけても全く浴衣一枚で逃げ出したとはいえ、一家揃って命を全うした嬉しさに、思わず涙がながれるのでした。・・・

火を潜ってきた身体には、殊さらに更け行く空気が身に浸みて参ります。まして病床からの母が、この上病勢を進めては一大事と、私が履いて居りましたフェルトの草履を腰の下に置いて蒲団代りとして、少しでも夜露を防ぐために、懐中していた半紙をやわらかく揉んで、襦袢代りに肌にあてがい、二人の子供達に代わるがわる膝枕を貸しながら一夜を明かしました。

一面に赤く焼けた真夜中の空の色の物凄さ、眼の前に輪郭だけ残して、黒く古城の様に立ってゐる帝劇の姿と、相対して坐っている私の感慨は無量でした。数日前、否、たった半日前まで、今日の初日の盛況を夢みながら、熱心に稽古をしていた、一寸先も知る事の出来ない人間のたよりなきをしみじみと感じました。

やがて夜が明けて、飢えと疲れと埃にまみれた、この世のものとも思われない人々の顔色にも、いくらかの生気が動いて参りました。私は車夫に築地の家を見て参るように、そして各自の足袋、食料を出せたらば少しでも持つて来るようにといいつけ、ひたすら車夫の帰りを待っていました。車夫は漸く帰って来ましたが、彼方此方の橋はみな落ちてしまい、数多い屍の上を踏み越えふみこえ家に近づいたところ、家は影も形もなく、四辺は全く焦土と化して居るということでした。今までは、多少の希望をつないでいましたが、この話を聞いたとき、今こそこの天地に自分の所有物と申すものは、身につけているだけのものしかない、全くの裸一貫であることを、判然と意識いたしました。けれども不思議に、悲観とか落胆、失望といった気持

は感ぜずに、かえって子供と病母を抱えて、自分も怪我一つしなかった幸いを、再び神に感謝するので御座いました。

これからもう一度出発点を改めて、勇ましく闘って行こうという、今迄味ったことのない、涙ぐましい程の猛勇心が奮い起って来ると共に、幼い折から父がよく動産の頼りないことに反して、身につけた学問、芸中が如何に尊いかと語り聞かせて呉れました言葉が、まざまざと嬉しく心に甦って参りました。一時は人に笑われても、社会に罵られても、職業を持っていたればこそ、こんな場合にも心の安心を保つことが出来るのだと思いました。私はこの時、まだ揺れている大地を力強く踏みしめて、大空いっぱいに叫びたい気がいたしました。①

「懲罰を怖れて出奔を思い立ったときは悲しかったが、それに踏み切ると生き甲斐を感じた。子どもながら郷土、近親、庇護、奉公を捨てるのである。」「自主にして自由、すべて可能にしてすべて達成できる、と私は信じた。みずから跳躍し、大空へ飛翔すればよいのだ。」②　かく語るルソーの『告白』を愛読する岡田嘉子は、女子美術学校で洋画を学んだあと、素人芝居からの依頼を契機に、俳優を志すようになる。やがて中村吉蔵に師

① 森律子著『女優生活二十年』三〇一―三〇八頁。

② Jean-Jacques Rousseau, *Les Confessions*. Paris, 1841. (Internet Archive). p.43.

〔参照〕ルソー著桑原武夫訳『告白（上）』岩波書店、一九六五年。六六頁。

事し、山田隆弥らの舞台協会に参加した。大正十年帝国劇場における倉田百三作『出家とその弟子』公演で、彼女は遊女かえでを熱演し、喝采を受けるのである。

震災の日々（岡田嘉子著『悔いなき命を』）

大正十二年の八月、舞台協会の撮影が新しくはじまり、監督は細山喜代松の『毒塵』でした。最初は軽井沢のロケーションで、その二日目が九月一日、関東大震災の日でした。私たち、その日は撮影がなく、みんなで軽井沢ホテルへ昼食に行こう、と仕度をしているとき、あの地震です。私たちは、てっきり浅間山が爆発したと思い、えらい所へ来たと庭において眺めますと、特別に噴煙が上がっていない。しかも揺れ返しはつきつきやってくるし、どうしたのかと不安を感じているうちに夕方となって、関東大震災の報が伝わってきました。大変だ、さっそく帰京しようと汽車に乗ると、一駅一駅、被害が大きくなっています。しかも列車は川口止まり。そこから先へは通じないというので下車してみると、東京の辺りの空は真っ赤です。時刻は深夜でした……

ここで一同は相談し、家族を持たない男性一人が私たち女一三、四人いましたーと一緒に残って、あとの男性は歩いて東京へ帰ることになりました。この川口の町も、おおかたは崩れていましたが、火災は少なく、また幸いに日活の常設館が無事に残っていましたので、私たちはおの二階、つまり弁士の休憩室のような室に入れて貰いました。まだそのころは無声映画でしたから弁士の室があったのです。けれども、だんだん東京近辺から避難してくる人が、この川口までもやってきて、私たちもいつまでもそこに居られなくなり、尋

ね歩いたあげく、近郊のお寺の奥に雑居して、おにぎりの配給を受けたり、小遣い集めて食料を手に入れたり、心細い毎日を送っていました。

何よりも大変だったのは暴動騒ぎです。これは後に分ったことですが、この震災事件をキッカケに当局が、つねづねブラックリストに載せていた（不穏分子）を弾圧しようと、有名な亀戸事件や大杉栄・伊藤野枝暗殺事件を起こし、そのうえさまざまのデマを飛ばしたのです。朝鮮人が暴動を起こして、井戸に毒を投げ込み、婦女子に暴行を加えるなどと、まことしやかに言いふらし、騒ぎは一刻ごとに大きくなって、人びとを不安におのかせました。その波は私たちが固り合っている寺の奥にまで押し寄せてきて、男の連中は竹槍を手に、夜つびて外を警戒させられ、女たちは火鉢の灰を集めて目つぶしを作り、いざという場合にはそれを投げつけて、手を取り合い、裏の崖から飛び下りようなどと、悲壮な覚悟を決めていました。あとから考えれば、馬鹿ばかしい話ですが、そのときはみな真剣で、血眼になっていたのです。

そうこうするうちに、赤羽まで列車が通い始めたと言いき、何としても東京へ帰ろうと、その列車に乗り込むことになりました。それはまったく文字通り割り込まなければ、乗車できなかったのです。乗降口などはないも同然、我も我もと窓ガラスを打ち破り、そこから中へ押し入る騒ぎ。それでもどうやら、その列車で赤羽まで行きましたが、それから先はもう二本の足に頼るしか方法はありません。・・・東京方面からの避難民の群れ。荷物を積んだ荷車が、あとからあとからと道一杯に広がり、その間を縫って歩くのがせいっぱい。立ち止まるもとも、振り返ることもできない混雑の中を無我夢中で歩いていると、「オーイ、みんな元氣かあ！」聞き覚えのある声です。思わず顔を上げると、それは先代猿之助さん。車の上から私の姿を見止め、声をかけてくださったのです。思いがけない出逢いに、うれしく胸がつまって、答えるひまもなく、

お互いの間は人びとに遮られてしまいました・・・

震災当日から一週間か、十日ぐらい経っていたでしょう。東京市内は一面の焼野原でしたが、もう死骸などは取り片づけてありました。その当時私が住んでいた孝ちゃんの家は、渋谷道玄坂の上にあったので、幸い焼けもせず残っていたのです。ホコリだらけのみじめな姿で、その家の玄関に立つと、孝ちゃんは両親ともども、無事でよかったよかったと喜んでくれました。「よっちゃんに見せようと思って、あんたの室はそのまま片づけないであるのよ。」孝ちゃんの言葉を耳に、おそろおそろ自分の室を開けると、地震で倒れた本箱のまわりには、私の唯一の財産、おびただしい本がいっばいに散乱し、足の踏み場もない有様でした。・・・市内の劇場は全部焼けてしまったので、当分は芝居どころのさわぎではありません。ときおりゲートル履きでやってくる山田と連絡を取るだけで、私は室のなかにひっそりしていました。

けれども、この時の収穫は、今まで読みたくても、あまりに大部の作品なので、なかなか手のつけられなかったトルストイの『戦争と平和』を、全巻読み通したことです。ナポレオンがモスクワまで入ってきたとき、モスクワ市民が町に火をつけて、家財道具を車に積み込み、大河のような流れとなって、モスクワを離れて行く優れた描写が、赤羽から東京へ入るまえに出逢った避難民の群れを重なって、私の胸に強く焼きついたことを、今でも覚えています。①

芸術座の解散後水谷八重子は友田恭助らとわかもの座を結成するとともに、汐見洋らの研究座に参加して有楽座でイブセン作『野鴨』の主役を演じた。通話会を通じて田村一家とも交誼を結ぶ。彼女が激震に襲われたのは、浅草の御国座に出演してほどなく、急病の療養中であった。

新劇の諸公演と震災の衝撃（水谷八重子著『女優一代』）

わかもの座で『幽霊』をやって間もないころ、井上正夫先生のところからお使いがまいりました。私に（大正十二年）正月の浅草御国座でユーゴーの『ああ無情』をやるから、コゼットの役で出ないかということですが。その年の春はもう雙葉を卒業してしまいましたので、なんの制約もうけず、友田さんたちとお芝居の勉強をしていたころだったので、よろこんで出させていただくことになりました・・・

この公演がおわりましたあと、わかもの座の試演を縫い、通話会という文士劇に出演したことがあります。たしか五月末の明治座だったようにおぼえています。この文士劇は田村西男さん、坂本猿冠冠さんが中心で、『盛綱陣屋』、新作の時代劇『金鰐』、それに中内蝶二作『大尉の娘』の三本でした。私は『金鰐』のなんとかいう娘をやりましたが、『大尉の娘』の艶子は田村秋子さんで、すぐに仲が良くなって『盛綱陣屋』では二人で雑兵の役をかってたりしました。歌舞伎の雑兵が着る筒袖では引き立たないからといって、鎧をつけて出たのをおぼえております。田村さんとはこれがご縁で、震災後芸術座再興の公演にも出演していただくようになったのです。

この『大尉の娘』は井上正夫先生が演技指導されたのですが、私に「露子を田村君に教えるから、きみもよくみておき給え」とおっしゃって下さったのです。それで舞台稽古も初日もみたのですが、単に見ただけというところでした。ところが翌月半ばに過ぎになって、急に井上先生から七月の御国座へでるようにとお誘いを受けました。そして、私に『大尉の娘』の露子をやらせて下さるということ、もちろん躍りあがってよろこびました・・・

こうして毎日井上先生に褒めていただく思いながら、露子をやっておりましたが、いよいよ明日が（御園座）の千秋楽だという夜になりました。強烈に盲腸が痛みはじめました。それまでも痛みはありましたが、千秋楽まではと頑張ってきたのです。舞台の無理がたたって、盲腸が悪化し、母や姉はお医者への指図通り、夜を徹して冷やしてくれましたが、お医者さまからは当分の絶体安静を申し渡されました。久しい間病氣らしい病氣もなかった私だけに、母や姉の心配は一通りではなかったようです。その心配をよそに、お見舞いに来てくれた友田さんや夏川さんと楽しくおしゃべりをしたり、義兄の蔵書を手当たり次第に持ち出して読んでみたり、気楽な療養生活でした。

八月いっぱいを療養生活に送り、九月一日になりました。空は晴れていましたが、ヘンに暑苦しい朝でした。裏庭に近い墓地で鳴いている蝉の声をぼんやり聞いていますと、いきなり地の底から突き上げられるような衝撃をおぼえ、やがてはげしくガラガラと屋鳴りがして上下に震動するのです。とっさに布団を頭からかぶりしましたが、まるで船の難破を思わせるように、激しく揺れ動くのです。

あまりの怖さに「お母さん」「アー（姉）ちゃま」と叫んでとび起き、柱や障子につかまりながら、やつとの思いで台所から裏庭に逃げ出すことが出来ました。そして寝間着のまま墓地のそばにちじこまっているところへ、母と姉が「よく起き上がったね」といいながら、青い顔をして駆けつけてくれました。二人と

もおびえながらも、私をかばうようにして、呆然とした表情でつた立っておりました。

このわずかな時間がどんなに長く感じられましたことか。そして、本当にこの世の最後の阿修羅場かと思われました。幸いに私の家は無事でしたが、墓地の墓石のほとんどは倒れ、どこかの土蔵でもこわれたのでしょうか、おそろしい土煙が空をおおっていました。こうした騒ぎのなかを、友田さんがご自分の小石川のお家が焼けたにもかかわらず、お見舞いに来てくださいました。その時のうれしさが今なお忘れ得ません。・・・その夜義兄（水谷竹紫）はこわがる私をひきずるようにして近くの牛込会館の屋上に連れて行きました。眼下に見える東京の街、それが見渡すかぎり火の手があがっていて、真昼のような明るさです。

義兄はそれを指して「東京はどうなるんだ、日本はどうなるんだ」と涙ぐんでいましたが、やがて激情に酔ったように「八重子、しっかりするんだよ。なあに、この会館が残っている限りは芝居はやれるさ」と繰り返して口走っていました。そうした義兄の昂奮とは反対に、私は妙に落ち着きを取り戻せるような気がしていました。一面の火の海の中に、ポツリポツリと焼け残った家の群れが点在しているのを知り、ホッとした気持ちになってゆきました。①

築地小劇場最初の女優田村秋子は、文学者田村西男の長女である。尾崎紅葉の門下として西男は、〈名人の至芸〉とも評される高雅な花柳小説を数々執筆するとともに、雑誌や新聞の編集にも携わり、文士劇の立役者でも

① 水谷八重子著『水谷八重子―女優一代』二四―二七、三五―四一頁。

あった。西男の妻繁子は娘ひとり、息子ひとりを遺して二七歳で他界する。①

大地震数ヵ月前女学校を卒業した秋子は、親睦会の素人芝居で初めて舞台に立っていた。出しものはブーシェキン原作の『大尉の娘』であり、父の縁故で新派の名優、花柳章太郎と井上正夫からあらかじめ指導を受ける。

田村秋子の生涯と周囲の人たちについては二冊の聴き書き、小山裕士編の『ひとりの女優の歩んだ道』と長男伴田英司による『友田恭助のこと』が詳しい。

田村秋子 文士劇への出演

あたしは小劇場に入る前の年に、父に勧められて初めて父たちのやっていた通話会の舞台に出て、生まれて初めて芝居というものをしたんです。神田女学校を卒業した年でしたわ。通話会というのは文士劇ともいっていましたが、あたしがでた頃は他の職業の方たちも多く、同好の士の集まりとでも申しましょうか、坂本猿冠者、鳥居清忠、三宅孤軒といった方々がスターでした。出た動機は自分が舞台をやりたいっていうじやなくて、「人の前で芝居みたいなのをするのはずいぶん面白いよ。いちど経験してごらん」という父の無責任な進め方につて、引っぱり出されたんですよ・・・

① 大城文美「花柳小説家・田村西男―滑稽文芸雑誌『笑い』にみる〈花柳小説〉」『近代文学研究と資料

（第二次）大城文美「花柳小説家・田村西男―滑稽文芸雑誌『笑い』にみる〈花柳小説〉」『第九卷（二〇一

五年三月）、一一二、七―九頁。

『大尉の娘』の初公演というのは花柳（章太郎）さんと井上（正夫）さんが初めて二人でおやりになって、前の月にたいへんな評判だったんです。通話会で『大尉の娘』をやるうということになったのも、先月のその舞台装置がそのまま同じ明治座に残っているの、それを使えばいいっていうんで、選んだ出しものだったんです。で、あたしがとにかく一応やったら、井上さんはじつと黙って見ていらっしやったんですが、何もおっしゃらないで、仏頂づらをして、いきなり羽織をお脱ぎになったんです。そして「これから私がお父さんの役をやってあげるからやってごらんさい」とおっしゃって、素人の女の子を相手に、そりゃもう本気でやって下さるんです。井上さんて偉い役者だと思いましたわ。・・・とにかく夢中で汗かくで、その芝居であたし、芝居っていうものが忘れられなくなりましたし、芝居っていうものの魅力にとっつかれたかも知れないんです。それ以前は芝居をしたっていうような気持ちは毛頭なかったんですけど、その芝居がすんでラクになって、この芝居の役にさようならかと思うと、たまらなくなりましたね。・・・

通話会の素人芝居に出たのは、それ一回きりなんです。それから震災にあったのですから。あたしのそんな気持ちが父親にもわかったのでしょうか。「君ね、芝居したいだろう」と言っただけです。地震の最中に、ほうぼう避難して歩いてる最中に。で、あたしは言っただけです。「芝居したいわ。でも、あたしのような者は役者になれない。」それよりも地震で焼けだされたあたしは、どこかに職をさがしてお金をとることを考えてたんです。ところが父はこういうんです。「どうせ何か仕事をするんなら雑誌の仕事をしろ。小山内さんがプラトン社にいるから、もしかすると、その女書生に使ってくれるかもしれないよ」って。そして大阪に行ったら、小山内先生に父が手紙でお願いしたら、先生、「僕たちの小劇場が近い将来に出来る。そのとき研究生として入れるからそれまで東京にいて待て」とおっしゃって下すっただけです。「ああ、あ

たしはまたまた芝居が出来る」―あたしはすっかりうれしくなっちゃいましたね。①

田村秋子 大地震のとき

英司 大正十二年九月一日の地震の時、おっかさん（田村秋子）はどうしてたの？

秋子 あの夏は本当に暑かった。あたしは神田・豊島町に住んでたんだけど、まったく大変なものだった。

・・・ドンドン、ドンドンって、下からつきあげて来て、坐ってなんかいられないのよ。お祖父さんとお祖母さんと三人で、お昼を食べていたのよ。とたんに、あたしの横の壁がつきぬけて、壁土がもうともしちゃって、何がなんだかさっぱりわからなかったわ。

英司 おじいちゃん（田村西男）はどうしてたの？

秋子 おじいちゃんは当時の京橋山下町、今でいうと電通の通りより、帝国ホテルによった河岸にあった中央新聞社にいたの。いまの高速道路の前の通りの辺に中央新聞社はあってね、その新聞記者だったのよ。・・・新聞社の二階の編集室で地震にぶつかたらしい。そこから日本橋馬喰町の近くの豊島町まで歩いて帰って来たのよ。もう二時すぎてたでしょう。その時のおじいちゃんのいでたちは、白餅に、カンカン帽、下駄ばきだったのよ。・・・

英司 おっかさんの住んでた家は、つぶれなかったの。

秋子 土蔵造りでつぶれはしなかったけど、横腹に大きな穴があいたから、どっちみち住めないわね。ひっきりなしに来る余震に、家がギシギシ、ギシギシってきしむのよ。・・・おじいちゃんが帰ってきた頃は、家の近所に火の手がもう見えててぬ。隣の町は龍閑町って言って、駄菓子屋の間屋が密集していた所だったから、その辺が火元だったんだね。中風気味のお祖父さんをかかえているから、早めに避難しないといけないと、お祖父さん、お祖母さんと栄造さん（秋子の弟）と四人で、上野山下の交番の辺で、おじいちゃんと落ち合う約束にして逃げたのよ。・・・本当にあたし、こわくてこわくてしよがなかった。おじいちゃんが、あたしの着物だけは持っていけっていうんで、栄造さん私の着物をしよってくれたの。風呂敷包みにしてでかけたけど、重いんで何度も捨てたくなったわ。とうとうあたいの荷物も栄造さんがしよってくれたわ。・・・私のおじいちゃんは家の焼けるのを見るとどこから市村座に寄り、そこで昔なじみの高梨さんと一緒に、子供達が上野にいらっているというんで、やっと顔がわかるくらい暗くなってたどりついたのよ。・・・高梨さんの東京の泊り先、根岸の大塚金之助さん（相場師）の家にひとまず行こうじゃないかって事になって、そこにぞろぞろ行っちゃうんだけど、あの非常時でなければ考えられないね。根岸の大塚さんの家じゃ、家の中はあぶないっていうんで、すっかり庭の池に張り出しを作っていてね、そこに緋毛氈いて、私達そこに一晚中すわっていたわ。①

① 田村秋子・伴田英司共著『友田恭助』中央公論事業出版、一九七二年。三四―三九頁。

帝国劇場で初舞台を踏みながら、ふたたび家業に戻った山本安英は、横浜で焼け出された実母と東京の山の手で文房具店を開く。その商売を実際には安英が担い、仕入れのため高円寺から浅草の間屋街へも頻繁に出かけた。小山内薫から呼ばれ、築地小劇場最初の女優となるのはその翌年である。

大地震直後のわが家（山本安英『新版 歩いてきた道』）

大正という時代も未近くに起って、数日の間に東京の文化を焼きつくしてしまったこの大事件は、私一人の生涯にとっても、また意味深いものだったのです。日本の新劇のある意味では出発点である築地小劇場が起ったのはこの焼け跡からであり、そしてしあわせにも私はその運動に最初から加えて頂くことができたのです。

その前に一寸私個人のことを申しますと、地震の時実母は二人の弟を連れて、東京の私の家へ遊びに来ていました。そして私の家は幸い災害をまぬがれましたけれども、実母達の横浜の家は、その貧しい家財もろともに一切が灰になってしまい、こうして母と弟達はまた新しい生活苦に直面しなければなりませんでした。母たちは養父の厚意から高円寺の駅のそばに小さな家を借りて、今度はささやかな文房具の店を出すようになりました。うちが近くなったので、私はしばしばこの高円寺の家を訪れ、時には養家の許しを得て数日泊まりこむようなことさえありました。弟たちは学校へ通っており、母は病身なので、結局私が店を引き受けたような気もちになって、一所けんめいに頭をしぼって窓の飾りを工夫したり、商品の仕入れをしたりしま

した。私は小さい弟の手を引っぱっては浅草の方へ出かけ、あちこちと問屋さんの店を廻って、その年頃なりにせいいばい頭をひねるながら、鉛筆だとか帳面だとか筆箱だとかゴム消しだとか、そんなものを自分一人の宰領で仕入れては、小さな体に大きなふろしきを背負って高円寺の家はかえってくるのです。愛読していた樋口一葉に、私自身がなったような気になりすましていたこともあったようです。筑地小劇場の話が起って、小山内、土方両先生から私がよばれたのは、このようにして日々を送っている時でした。①

東山千栄子の夫河野通一郎が属する原合名会社は、富岡製糸場等を傘下とする横浜の絹物輸出業であった。革命の余波によりロシアから撤退したあとも同社は発展を続け、河野はさらにニューヨークやリヨンの支店へと赴任する。他方千枝子は苦勞の多い海外生活を自重し、以後は日本の留守宅でながく生活した。子どもを持たぬ富裕な奥様として、種々の趣味にも手を伸ばしながら、無為と倦怠を感じる日々と自伝では回顧される。神奈川における紡績産業の壊滅をはじめ、関東一帯の惨禍に直面して、三三歳の彼女は文明や世事の空しさに慄然とし、この世で生きる意義を懸命に考え始めた。

帰国後の日々無為（東山千栄子著『新劇女優』）

ロシア革命の大正六年に日本へ帰って、それからここまでの六、七年間何をしていたかということになり

① 山本安英著『新版 歩いてきた道』一九二〇頁。

ますが、実はこの六、七年間は私にとって全くの空白であったような気がしております。それも自分の性格から来る一つの悲劇とでもいいましょうか、何事もなく大変苦しかった時代です。主人は永年築いた働き場所を失って失意の中にあるといっても、やがて仏蘭西に行き、アメリカに行き、また静養のため帰国して本店詰めでおります時でも、文学的な持前と共にいつも青年のような強い研究心で、身分や年齢にかかわらず、大學に行つて学生の中に交つて講義を聴くことさえも出来る、そういう風でけつして退屈することなく、従つて時の動きのよく解る人としていつも重用されておりました。それで商人というよりも書齋人的な風格がありました。そういう理解の中にありながら何故か私は、なすことのなくて日を暮らしているが気にしていました。・・・

モスコで全部を失ったといつても、日本に帰って住む家に困るのでもなければ、明日の生活に心を碎くのものでもありません。女中が何人もいて、子供のない家庭の仕事は、めいめいの分担がらくに済みますし、これは主人について外国に行つて暮したとしても同じこと、私はいよいよ平凡な有閑夫人で眠り込む外なかつただろうと思われれます。とにかく仏蘭西へもアメリカへも主人は一人で行き、私は日本に残っていました。もしも無理に一緒に暮したとしたら、私の剛情が目立ち、主人のかんしゃくがつり、原因という程のものではなくて、どちらも面白くない、一般に夫婦のこういう時期のことを倦怠期といっています。二人が一致して打込む仕事のない悲哀、殊に一方がまるで手あきでいる状態では、余計に空虚が目立つのです。

こんな風で表面は一応調うた生活をしながら、過ぎて行く月日をとらえる術もなく暮らしているところへあの大震災が見舞いました。下町の住居ではありませんから、直ぐに戸外にのがれて、身命に及ぶような被害は受けませんでしたけれども、瞬間に行われた帝都の大破壊の前に、私は初めて長い眠りの眼をさまされ

ました。①

震災の衝撃と人生の転換 (東山千栄子著『私の歩んだ人生』)

日本に帰ってから、主人はリヨンやニューヨークなど海外の勤務がやはり多かったのですが、私の方ほうも外国生活がいやになり、日本の留守宅に残って、当時の流行語という有閑夫人の毎日を送っておりまして。とにかく退屈でたまりませんので、その倦怠と無為とをまぎらわすために、いろいろなおけいごとをしてみました。しかしどんなに精を出してみたところで、どれもこれも奥様芸以上に出ないことを、私は自覚せざるをえませんでした。

そこへ来たのが、大正十二年九月一日の関東大震災でした。思いもかけなかったこの突発的な天災で多数の人命があっけなく奪われ、家や施設が灰燼に帰してしまいました。その悲惨な現実には直面して、私は人間とはなんとはかないものだろうということを、つくづく感じさせられました。そして、自分を省みたときに、愕然としました。

私はいったい何だったのでしょうか？ ただ生まれてきたから生きているというだけで、これではうじ虫の命と同じだと思いました。私のこれまでの生活は、あってもなくてもいいような、希望も理想もない、ほうとうにむだな、くだらない生活だったのです。子供ひとりない私は、子供を育て上げるという、大切な母親の義務を果たすこともできません。河野の家の両親もすでに夜を去っていて、お世話をしてあげる人もおり

① 東山千栄子著『新劇女優』五二―五四頁。

ません。生活費をかせぐこともなく。ただ主人に食べさせてもらっているのです。

自活できない、無力な女の生き方に私は疑問をいだきました。そして、なんとか勉強して、独立できるだけの教養を身につけねばならない、そこからほんとうの私が始まるのだと考えました。

私はそう決心してまず本を読みはじめました。それはいわが手当りしだいの、秩序のない乱読でしたが、とにかくこうして私は、なにかをつかまなければならないと決意したのでした。①

房総半島北条へしばらく転居した及川家では、避暑地での快適な自然と交遊によって娘道子の健康もかなり回復した。小学五年生の夏休みも明けて、帰京と登校の準備を始める九月一日、館山湾沿岸も激震と津波に襲われる。道子など子ども三人は倒壊する家屋の下敷きとなり、辛うじて知人に救出された。自伝『いばらの道』には苛烈な地震と避難の様相が、繊細な感性をとおり仔細に語られる。

房総で倒壊家屋の下に (及川道子著『いばらの道』)

いよいよ今日から九月という日は、朝早く通り魔のようなひどい嵐があつて、それが過ぎた後は、また気味の悪い程のいいお天気になりました。お昼近く母は裏の井戸端でたら一杯のお洗濯に忙しそでした。父は一等小さい弟の菊夫を抱いて、お守りをしながら庭を散歩していられました。和夫と冬生は奥の間で佐

① 東山千栄子著『私の歩んだ人生』二九―三〇頁。

々木さんを相手に何かおもちゃをいじって遊んで居りました。そして、私と強子と従姉の浜ちゃんとの三人はお茶の間でおままごとに夢中でした。

そのお茶の間の窓近くには大きな橙の木がありまして、その実を取って遊んでいたのですが、丁度強子がそれを採ろうとして、手を伸ばした瞬間、不意に沖の方で雷の鳴るような音がしたかと思うと、いきなりミリミリ、バーンバーン、ガクガク！という物凄い響と共に、柱は折れ曲り、襖障子は弾け飛び、壁は崩れ落ち、家は今にも揉みつぶれるようで、畳はまるで波のように揺れうねり、棚の上のものは何一つ残らず転げ落ち、一瞬にしてあたりは言語に絶した修羅場と化していました。

私はとっきの場合に、日常父から地震の時はあわてて外へ出てはいけない、と教えられたことを思い出し、三人一塊となって、畳にうつ伏してしがみついていた。いえ、その場合出ようにも、どうしようにも、立つことはおろか、腹ばうことすら出来ないのです。・・・

そのうち震動が少し小止みになった隙を見て、佐々木さんに抱かれるようにして、弟達は戸外へ飛び出して行きました。これを見て私達もこの時だと思って、三人一緒に二、三步歩みかけた時、ああ何という恐ろしいことだったでしょう。前よりも一層物凄い地鳴りと共に、もっと激しい震動が襲って来たと思う間もなく、倒れかかっていた柱、崩れ残っていた壁、そして落ちかかっていた天井が、この時とばかりに鋭い悲鳴をあげて、一時に私たちの上に覆いかぶさって来ました。手をひいていた妹を護ろうと、自分のからだを伏せた瞬間、どしりと重い板のようなものに押え付けられたと思うと、そのままあたりは真暗闇になって、何も見えなくなっていました。・・・

屋根、天井、柱と三重にも四重にも抑えつけられた私達を掘り出すには、とても父と佐々木さん二人の手にあわず、と云って隣近所どこでも皆同じように困っている時とて、手伝って貰うことも出来ず、氣ばかりあせて弱り抜いておられるとき、折良くいらった高等師範の方々に手伝って貰って、先ず従妹、それから私と掘り出されましたが、最後の強子は大きな重い柱に片方の足を圧しつけられているので、これを引き出すのに随分手間取りました。その間強子が腹を千切られるような悲しい声をしばって「もうこれからいい子になりますから、助けてください！」と泣き叫んだあの有様がまだ目にみえるようです。

こうして幸いにも一同命に別條なく、顔を合わすことが出来て、庭の大きな橙の木の下に、寄り添ってホット一息ついていると、またしても大きな震動がやって来ました。薄気味悪い地鳴り、亀の甲形に裂けて行く地割れ、そこから噴き出す水、そしてあちこちに起る人畜の悲鳴―これこそ全くこの世の終りかと思われました。

この時父はつと立ち上り、泣き叫ぶ一同をおししずめながら、諄々とした非常時に処する態度を訓えたのち、両眼に涙を浮かべながら悲壮な声を張り上げて、「主よ　みもとに近づかん　のぼるみちは　十字架にありとも　など悲しむべきや　主よ　みもとに近づかん」と讚美歌を歌い出しました。そして、歌い終ると一同深いお祈りをいたしました。

このとっきの場合の、こうした父の落着き払った態度に、威圧と限りなき信頼を感じてか、付近の人々までが、私たちのまわりに寄り集まって来て、みな一様に鳴りをしづめて父の言葉に耳を傾けていました。

するとどこからともなく、津波が襲って来るかもしれない、という警報が伝って来ましたので、みんな山の方へ逃げなければならなくなりました。強子だけは足を柱で押しつぶされて、ひどい怪我をしてとても歩けませんので、米屋のリヤカアを借りて運びました。

山の上に来て見ますと、そこはすでに避難している人々で一杯でした。泣くもの、喚くもの、唸るもの、また傷けるもの、死せるもの―折柄後ろの森に沈もうとしている赤い夕陽にてらされて、それらの人々の姿は戦乱の巷もこうあろうかと惚けられるほどでした。

ところが夜に入ってから、ここもまだ不安だと云うことになり、子供たちだけでもつと上に登って、そこにやっと落ちつきました。そして毛布を敷いて貰って休みましたが、いつ襲うかも知れない地震と津波に対する恐怖に加えて、折柄燃え続けていた隣村の山火事が、だんだんこちらにも移って来そうに見え、燃えさかる火を見ては、恐怖が募るばかりで、周囲はいつまでも騒々しさが止まず、殆ど眠ることも出来なませんでした。

それでも明け方少しは眠ったものと見え、朝眼を覚まして、何気なく上を仰ぎますと、そこにはいつもの天井の代りに低く覆いかぶさった松の枝の隙間から高い空が覗いていました。そして、丁度東の空には真紅な太陽がやっと上りきったところでありました。

隣りに寝ている強子ももう目を覚まして、繃帯を巻きつけた足を毛布の裾からのぞかせて、痛そうに顔をしかめながらも、心配そうに私の方を見守っています。私はふと寝返りを打とうとして、体を動かしますと、胸のあたりがズキンズキン痛むので、恐るおそる手を触れて見ますと、いつの間にか繃帯が幾重にも胸に巻きつけられていました。―あとで知ったのですが、屋根の下敷きになったとき、肋骨を挫かれていたのを、寝ている間に手当されていたのです。

段々明るくなるにつれて、周囲に目をやると、右にも左にも、前にも後ろにも、頭や手や足を繃帯した怪我人や、むしろや布切れに包まれた死人が無数に転がっています。私はその惨状にゾツとしてしまいました。

その日のうちに、海岸にあったパラーの天幕を持って来て、諏訪森の丘に小屋を建てて、その中に私たちは収容されて、こうして私たちの山の生活がはじまったのでした。 ①

料理の達人としても著名な女優沢村貞子は、歌舞伎作者の娘として浅草で生まれた。同家の息子たちは子役としては早くから舞台に立ち、兄は四代目沢村国太郎、弟は映画俳優加東大介として大成する。男女平等を旨とする第一高等女学校で学んだ長女貞子は、女優として立てる新劇の道を志し、まずは築地小劇場の山本安英に相談の手紙を送った。彼女が大地震に襲われたのはその数年前、女学校三年のときである。大火によって浅草猿蓑町の自宅は焼尽し、父と母がひととき行方不明となった。衝撃を受けたのはまさに台所で昼食を用意するさなか。気丈な母親は娘らへさきに避難するよう命じ、みずから脱出したあとは浅草寺の炎上防止を人々に督励した。

歌舞伎一家の震災（沢村貞子著『貝のうた』）

大正十二年九月一日の関東大震災は、私が女学校の三年の二学期、始業式の日に起こった。学校から帰った私は、昼ご飯の仕度をしていた。父母も弟も芝居へ出かける直前だった。兄はひいきの客に連れられて、箱根へ行って留守だった。毎月朔日、十五日には小豆ご飯を炊くのが、芝居ものの習慣である。でき上がったご飯をお櫃に移し、お豆腐のおつゆの味をみようとお皿に口をもって行ったとき、突然グーツという

うなり声とともに家がぐらぐらとゆれ、あわててガスの火を消した私は、足がもつれて尻餅をついた。まわりじゅうの壁がバラバラと落ちて、鍋の中が白くにごった。

二階で掃除をしていた母が、階段から転げ落ちながら叫んだ。「早く火を！ガスを消して！」また激しくゆれて、やっとガスの元栓をしめた私の足元に、鍋が引っくりかえった。新聞をよんでいた父は、数いていた座ぶとんを頭にのせて「ナミアミダブツ、ナミアミダブツ」と口の中でブツブツ唱えるばかりだった。そのまま動かないのは腰が抜けたらしい。案内柱がしっかりしていたのか、わが家はひどくゆがんだだけで、つぶれなかった。丁度昼飯時だったせいもあって、あつという間に八方から火の手が上がった。みようにシンとした異様な空気のなかに、激しい叫び声、泣き声が鋭く耳を破った。余震は絶え間なくつづいた。

「私と父さんはもう少し様子を見るから、あんたたちはとにかくさきへ逃げなさい。」母は急いで小豆ご飯のはいったお櫃と三本の鯉節を私にわたしながら言った。弟にはお湯のはいったままの鉄瓶をもたせた。吾妻橋を渡って向島で落ち合う約束しているところへ、父の妹ひさ伯母とその養女で私たちの姉せい子が、着のみのままで転げながらたどりついた。ほんの一町と離れていないのに、ここまで来るのが命がけだったと、叔母はあおい顔でオロオロ泣くばかりだった。母の姉とみ叔母もかけこんできた。

「とにかくこの子といっしょに先にお逃げなさい」母は私の腰にずっしりと重い袋を結びつけた。五銭白銅ばかりはいった、うこんの財布である。そのころの芝居の当たり祝、大入り袋の中身は五銭の白銅玉だった。これが好景気時代の、母のただ一つのへそくりだった。

結局私たちは母と約束した向島へ行けなかった。吾妻橋の上で向島から逃げて来る人波に押し返されてしまった。川の向こうもあちこちに火の手が上がっていた。やっと上野の山へたどりついて、その夜をすごし

た。西郷さんの銅像の傍へやっと座れるだけの席をとった。あたりはいっぱいの人だった。その人たちが夜ふけとともにものを言わなくなった。不気味な静けさのなかで、動物園のライオンや虎のうなり声だけが、ときどき大きくこだました。上野の森から見おろす下町には、何十本もの真っ赤な太い火柱が、空を焦がすように傲然と立っていた。仮借なく人間たちを焼き殺す地獄の火が、どうしてあんなに美しく見えたのだろ
うか。・・・

母はきつと生きている。そして父を守っているにちがいない。私はそう信じていた。夜の明けるのを待って、私はその付近の貸家をさがした。庇が落ちて、ひどく汚いけれど、安い家が見つかった。屋根さえあればそれでいい。大家さんの米屋の主人に一生懸命たのみこんだ。やっと承知してくれた米屋さんは、畳の上に五銭白銅を前家賃として並べる十四歳の少女の顔を、あきれたように見つめていた。お米に味噌、鍋とふとの借り賃を払っても、白銅はまだ何枚が残った。

二人の叔母と弟をそこに残して、私と姉は父母をさがしに浅草へ向かった。道々まだ何べんも自警団に止められて本籍姓名をいわされた。恐ろしい噂はますます拡がっていた。焼けたあととはまだブスブスとくすぶっていた。こわれた蛇口からチョロチョロと流れでる水で、草鞋をしめさなければ歩けなかった。地熱で足の裏がやけどしそうだった。

そこだけがたった一カ所焼けのこった浅草観音堂へたどりついたのは、夕方近かった。境内には運よく命びろいをした人たちがいっぱいだった。「加藤伝太郎さーん。加藤マツさーん」姉と私は声をからしてよび歩いた。本堂の前の大銀杏の根もとに張ったボロ切れのテントから、「ここだよ！ここにいろよ！」母が這いだしてきた。つづいて父も「おい、無事だったか」と涙を浮かべてすがりついた。自慢の高い鼻が、すり

むけて赤くなっていた。

「あら、貞ちゃん」近所の半玉のうさぎちゃんも、どろんこのアッパッパで顔をだした。長唄のお友達である。まっ黒に煤けた顔にサンバラ神―どうみても浅草きつての売れっ子の雛妓とおもえなかった。うさぎちゃんは「お貞ちゃんとおばさんのおかげで助かったのよ。たのしかったわ。おばさんは、ほんとうに、」と溜息をついた。

その話によると、母は命からがらここへ逃げこんだ人たちを叱咤激励して、本堂に火のうつるのをふせいだという。そしてどうやら火が消えて、やっと落ちつくと、味噌屋の焼けあとからは焼け味噌を、肉屋の店からは焼き肉を掘り出して、まわりの人たちに公平にわけ、飢えをしのがせたそうである。・・・私たちが家を逃げ出すと間もなく、三方から火の手がせまり、さすが気丈な母もつづら一個を背負って逃げるのがやっとなかった。・・・すぐ目と鼻の瓢箪池にはまだ死体が浮かび、本所の被服廠あとでは、逃げこんだ人たちの持ち込んだ荷物に火がつき、三万人あまりが焼け死んだとまわりの人が声をひそめて話していた。・・・年も押しつまって、浅草の焼けあとにバラックができた。大工の叔父が「はやくお貞ちゃんを引きとってやらなければ、」と、一生けんめいに奔走くれたおかげである。一時しのぎのお粗末なものだが、私には御殿のように見えた。東京っ子の復興の努力はめざましかった。近所の人たちも、その年のうちにあらかた帰ってきた。①